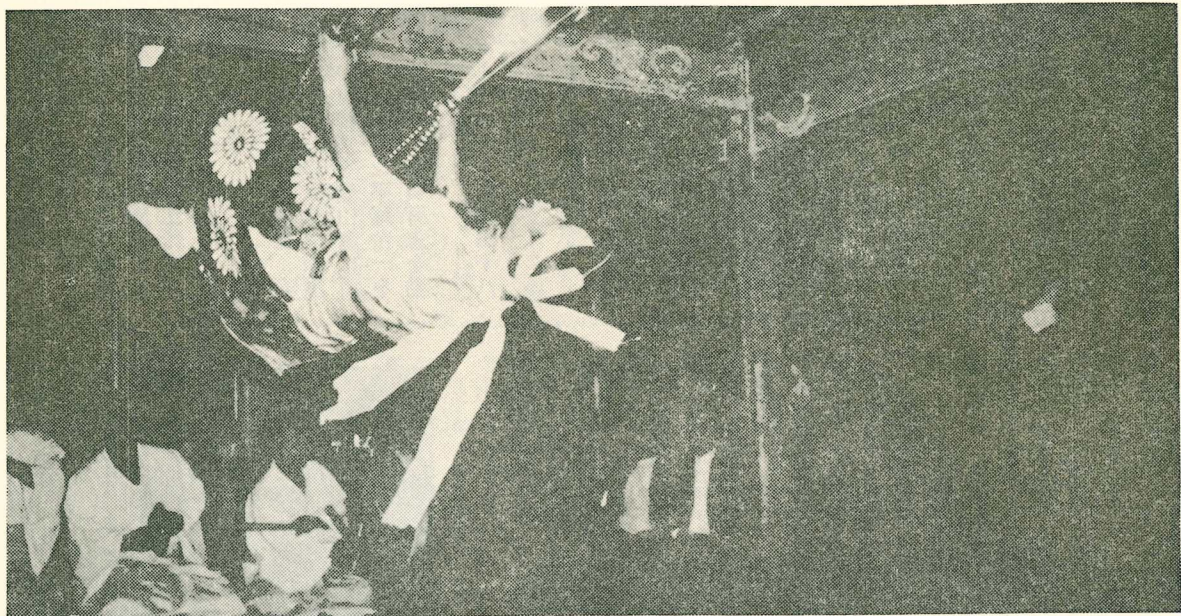


北九州市の文化財を守る会
会報

No.10 49.12.20

発行 北九州市の文化財を守る会
北九州市小倉北区内1-1
北九州市教育委員会文化課内
電話 582-2389



横代神楽 剣の舞

北九州市に文化財を守る会が発足して以来、にわかに文化財愛護の意識が高まってきたことは同慶のいたりであります。ことにうれいのは文化財愛護少年団の活動です。あの三角の旗をひるがえして野に街に活躍する少年たちのいきいきとした表情は、わたしたちオトナに対する無言の抗議であり、無秩序社会への警鐘だと思っております。ところでわたしは考えるのですが、文化財という認識は、とかく古墳とか、建物とか、彫刻、絵画などという、大きなもの、有名なものだけに眼がそそがれがちなのではないでしょうか。古人がのこした香気あふれる価値高い文化財を完全な形で次の世代に伝えていくというのは、人間の美しい任務ですから、それはそれでいいのです。

しかし小さなもの、無名なものでも、たいせつに保存しなければ、いつのまにか失せてしまうことになるのです。しかもそれらは野や山にではなく、思いがけもなくわたしたちの家の中にあるのです。押入れの中や、縁の下や、物置き小屋の隅に、何十年の間、ひっそりと眠っていることが多いのです。

自在かぎや天びん棒、石臼、火吹き竹、祖母が使った手鏡やお歯ぐら道具や箱まくら、油壺、弁当箱、重箱、箱膳、あんどん、ちようちん、がんどう、ひようし木、帳場格子、矢立て、銭箱、火消道具や火消装束古い柱時計、日時計、砂時計、羽子板、扇、双六、かるた、さいころ、ひな人形、亥の子つきの石、力石、洗面用の小たらいや脚長だらいなど、いわば生活文化財ともいうべきこれらのものは、すべてわたしたちの先祖の生き方を教えてくれる貴重な品物なのです。

これらはすべて有名でないどころか、へん、あんなものがあ、と、むしろ軽蔑されるような存在かもしれません。なかなか、どうして、こんな一見つまらないようなものであっても、それはわたしたちのふるさとの美と力と智慧を物語ってくれるありがたい品なのです。

来年には市立の博物館が生まれることになっていきます。博物館は、地域の歴史を解説するとともに、文化財を保管し、陳列し、市民が研究する場所でもあるのです。もう、けつして、こんなものが、と棄てたりしないで、どうか博物館に寄付してください。手近かにある無名の文化財に眼をくぼるのも、文化財を守る会の仕事に加えていただきたいものがあります。

(劉 寒吉)

無名の文化財

藍島は非常に樹木が茂っていて、本村から樹に登れば地に降りることなく北端の干畳敷まで行くことができたという。細川氏が入国された当時もやはり亭々たる大木がおい茂っていたが、周囲が海であるから伐り倒しさえすればすぐ海で運搬が至極簡単であるので盗伐が盛んに行われていた。そこで細川公は筑前国の猪熊某を山番に命じ島に留まらせて監督させたという。この猪熊某も細川公が肥後に国替えになったとき随従したので、島に関する書類等も全部持って行ってしまったという。

またその頃、堺町にある求道院の近所の人たちが季節的に移り住んで漁をしたという。藍島の人たちが求道院の門徒であるのは、この人たちの勧誘であるという。

●一六一八(元和四年)、今から三百五十六年前になるが、二月十一日長州の向津浦(今の山口県大津郡油谷町大浦)で海士業を営んでいた十右衛門種正という者が、海士三十七名を連れて小倉にやって来た。そして、細川忠興公にまみえて、当地に居住し海士業をさせてもらいたいと願った。忠興公は海士の入来はとも縁起がよい、めでたい前兆だと大喜喜こんで、家老松井佐渡守を呼び寄せて相談し、船頭町の櫓下を貸与して其処に居住させた。

その後またお目見えを仰せつけ

られ、狛場を見立てるよう仰せられたので、すぐに馬島か藍島のいずれかをと申し出たところ、馬島は当城の鬼門に当るので人が栄えないだろうから藍島を狛場として永々預けるとご沙汰があった。そこで仰せに従い種々準備を整え、六月六日藍島に始めて渡り、そこに小屋を建て、三十七名の海士を指揮して仕事を始めたのであった。勿論年間四百五十斤の干鮑を納めるという条件付きであった。

●ところが、その直後に十右衛門公がまた御看御用聞を仰せ付かったので島に詰められなくなり、手代として弟源蔵をやり、海士支配を代理させることになった。源蔵は何年後には妻と長男を呼び寄せ、長男に海士支配の役を譲ることになるが、この源蔵こそが藍島住民の第一号であり、現在の両羽家の先祖である。両羽家は三代で分家(両羽丈一家)、四代か五代で分家(両羽勝久家)して二戸三戸となつてはいるが、海士の人たちも定住するようになって戸数はだんだんふえて行ったが、小笠原時代から十四戸の制限が長く続いていたが、明治十五年から十七年にかけて十七戸になり、藍島の共有地には十七戸名儀のものが多い。

明治以降のことはこれくらいにして、これで筆をおくことにする。

このような推理などでなく、一

日も早く資料を集め、研究を進め、確実なものに近づけたく念願しているけれども一人や二人では心細いばかり。皆様のご指導、ご支援をお願いする次第である。

生きている平尾台
小倉南区 溝口 連

「文化財を守る会」の会旗がハタハタとさわやかなそよ風にたわむれて原いっばいに穂したススキ穂の、平尾台カルスト高原を行く。

先導の旗手は北九州ボーイスカウト第四十八団のスカウト、中学生、小学生幼稚園児をまじえた一行五〇人、総じて文化財愛護少年団。

今朝石原町駅より徒歩で登山。所要時間一時間四〇分かつたという。平尾台センターで小憩し直ちに行動開始。各自ポリ袋を持ち路傍の塵芥収集作業。幼児といえども決しておくれをとらぬ同一行動は、さすがに瞠目すべきものがありその健気な奉仕団に接して、心なく散らかす登山者の、天然記念物平尾台に対する関心と理解のなさやうとまれて、一昨年行われた植物調査の光景が今更思い出される。キンバイ草、クリハラン、クワバラ草、狐ノカミノソリ等々畑中教授は草の名を読む、太田教

授はそれをノートする。クモキリ草、ヘビケツイバラとドリーネツヤングルを踏査し、原を探り月奈をかけて集録した生成の植物五〇〇種以上、このうち幾種かはこの高原以外にはないという。神力先生担当のシダ科においては一一〇種、このうちイワオモダカ、タチデング、ツルデング、セクリイノモト、キドイノモト、ビロードシダなど他の高原には未記録のシダが平尾台には生育していると聞かされ、更に薬草の宝庫と熊本大学薬学部の先生が折紙を付けられるなど思い併され、また台上至る所に考古学的に貴重な縄文時代の土器、石サジ、ヤジリ、石器の多数の出土がみられ、なおまた北九州ケイビングクラブ、福教大、学習院大等洞窟調査班の調査中の洞窟及び穴と名付けられ現在調査研究中のものが三九個、未発見のものも相等あるらしく、中でも天然記念物指定の千仏鍾乳洞を筆頭に牡鹿洞、青竜窟、藤戸洞及び多田鍾乳洞があり、洞内の鍾乳石石筍は幾数十万年となく大地の歴史を語りつづけ今もお管々と成長を続け貴重な資料を包蔵している。

この平尾台はカルスト台地としての規模は誇るに足らずとも、典型的要素を具備し天与に育まれ育つ草々と、大地の中の洞窟と、鍾乳石筍と露出カルストとドリーネは寸時も休まず管々と成長を、

▽会報十号の発行が大幅におくれましたが、このほどできあがりましてのお届けします。

▽八月末に菊池会長のご不幸という会にとって重大な出来事がありました。加瀬会長職務代理をはじめ役員の皆様、会員の皆様のご協力により、当初の計画とおりの会報の発行、萩・大宰府へのバスハイク、文化財セミナー、文化財保護強調週間行事―本年の事業を無事実施することができました。

▽お忙しい中原稿をお寄せいただきました方々に厚くお礼を申し上げます。

▽会報充実のために、会員の皆さんの積極的な投稿をお願いします。特に始めての方の投稿は大歓迎です。それでは皆さんよいお年を、

文化財保護強調週間行事

クリーン平尾台

わが国有数の孤立高原カルストとして特色ある景観と学術上の価値をもつ国指定天然記念物、国定公園平尾台は、また、北九州市民のオアシスとしても親しまれていますが、最近、一心ない登山者の捨てるゴミなどによって、台上の環境が損なわれています。

本会では過去に平尾台保全アピールを行なうなど、平尾台に強い関心を持っていますが、ことしの文化財保護強調週間行事は、特に平尾台保全の重要性を登山者に訴え、会員自らも再認識しようとして、「クリーン平尾台」をめざし、十一月四日、文化財愛護少年団や会員有志を動員し、台上清掃作戦を実施しました。

次の記事は、当日参加されたボイスカウト第四十八団・藤井利明隊長から寄せられたものです。

平尾台清掃パトロール記

石原町駅出発。トップは「守級生に教えている者もいる。る会」の三角旗。FTGのチビッ子、B S隊、滴水会、お母さん達と続く五四名の縦隊は、人目を引く長さだ。

快適なピッチで、稜り入れ後の野道を楽しむ中に、いつしか爪先上がりになり、紅葉が一段と美しくなる。

「参加して良かった」と、お母さん達がさかんに連発している。展望が開け、井手浦の浄水場が足下に沈むと、右手にセメント採石場の「漏斗状」に削られた岩肌

が、秋陽の中に痛々しく迫る。月例登山の福智頂上から見た、台上のカッティングの凄さを、下



駐車場のゴミチェックを始める。

パトロール指導を引き受けて下さった、溝口連先生(平尾台監視人)と、初対面の挨拶を交す中に、文化課職員も、カメラを首に、俳句行とおぼしき女性群に囲まれ、上気した顔でバスから降りて来る。

ミーティングの後、道の左右に分かれ、三人に一枚のビニ袋を配り、いよいよ作戦開始。

出動前の情報は「余り無いだろう」とのことだったが「早くも第一ポイントの、牡鹿洞前のゴミ箱周辺から凄むことになる。B S二名に焼却を命じる。非常器具の三徳スコが活躍するが、やはりガゼキ類の作業具を一通り用意すべきだった。

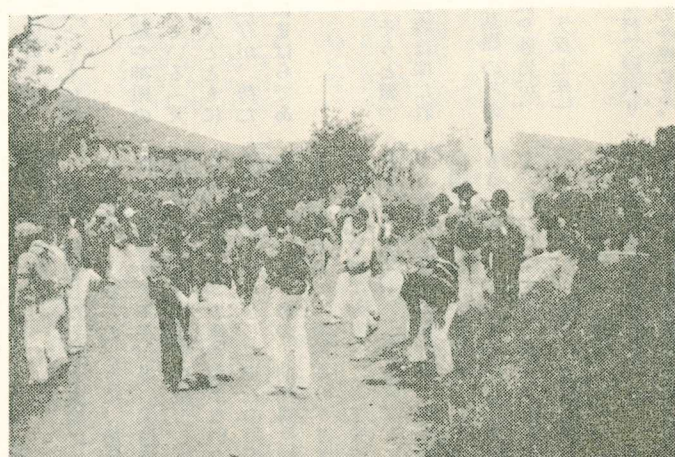
前後衛の車注意が、頻繁になる

中を第二ポイントに向う。ススキの中に見つけた、可憐なリンドウなどに気を取られながらも、チビッ子達良く働く。人海作戦が功を奏し、隊の通過後は見違える程スッキリとなる。

バス食堂前のキャンプサイトは、二か所に山積してB Sグリーンパー三名にまかせ。立ちのぼる煙に「何事だろう?」と徐行する車の中から好奇の目が注がれる。茶ケ床への道は、前面が大きく展らけ、ススキと、草紅葉と、石灰石の羊群のコントラストが、息をのむ程美しい。

大きなゴミ袋を引きずり、拾うことに忙しい子供達の序列に、情容赦なく車が割り込む。後衛の合図で、一斉に両側の草叢に半身を踏み込む子供達を、ガスとホコリがモウと包んで、目も開けられない。やっと隊列が見透せるようになる。今度はモトクロスのマシンの列が、小石を跳ねながら爆音高く踊り上ってくる。よろめいてススキに積った、火山灰状?のホコリをかぶり、半ベソの女の子達

「ホウホウの体でラストポイントに到着、あたりの惨状?にげんなりする。一面の紙屑が風にソソ毛立ち、正に夢の島?だ。オヤツタイムの号令もしばし忘れられた程。雨で地面にへばりついた奴を棒で掻き起こし、カヤの根株につきささっているジュース缶を集め



と、平尾台に対する厳しいまでの愛情に心打たれた。お楽しみプログラムの牡鹿洞見学を終え、いささかグロッキーになって乗り込んだバスの中から振り返ると、カルスト台地の上空に、無数のゴミ漁りのカラスが乱舞していた。

北九州市文化財愛護少年団

BSK48団隊長

藤井利明

平尾台メモ

平尾台は、長軸(南北)約六キロ、短軸(東西)約二キロ、その周辺が約四十度の急斜面によって囲まれた標高三〇〇メートルから五〇〇メートルの盆状台地である。地形上、台地は平尾集落を中心に、北東部の裸出カルスト地帯と南西部の被覆カルスト地帯とに分かれている。天然記念物指定地域は、この北東部の面積約三二〇ヘクタールで、次のカルスト諸要素からなっている。①羊群原を中心とするカツレンフェルド②かがり火盆地から平尾集落にかけてのドリリーネ、ウバーレ、ポリーエ、ポノール③南東部山腹の石灰洞と瀑布性湧泉④南部の三笠台を中心とするコックピット群⑤北部の石灰岩と花崗岩との接触部における陥没性大ドリリーネとカルスト崖。

わが国特有の孤立高原カルスト。指定は昭和二十七年十二月十二日。



本会の副会長であります米津三郎さんが、第七回市民文化賞を受賞しました。市民文化賞は毎年文学、美術、音楽、芸能の各部門で活躍し、北九州市の芸術文化の振興に寄与貢献した新人に贈られています。

米津副会長

市民文化賞受賞

米津さんは、文学部門の領域において、北九州市における郷土史の研究と著述活動にみるべきものがあつたとして受賞されました。とくに小倉の豪商中原嘉左右の幕末から明治中頃までの克明な古日記を解説した「中原嘉左右日記」は非常に高く評価されています。昭和四十五年から刊行を続け、現在八巻が刊行中で、昭和五十一年には全十二巻が完結します。

今回の受賞は、現在郷土史を研究している仲間、あるいはこれから研究を志す人たちにあって、大きな励みや目標となり、北九州市の郷土史研究は更に進歩発展することでしょう。

写真は、今年度の市民文化賞受賞の方々です。向かって左が米津三郎さん。
(中原嘉左右日記 昭和三十八年福岡県民俗資料に指定。三十七冊。小倉図書館蔵。当時の政治、経済、文化をうかがうことのできる好資料である。)

鎮守の森を

守り育てよう

八幡東区 鴻江敏雄

百万都市、北九州市では「緑の森」を殖やそうと盛んに公園の増設が実施されており、喜ばしいことと感謝しております。

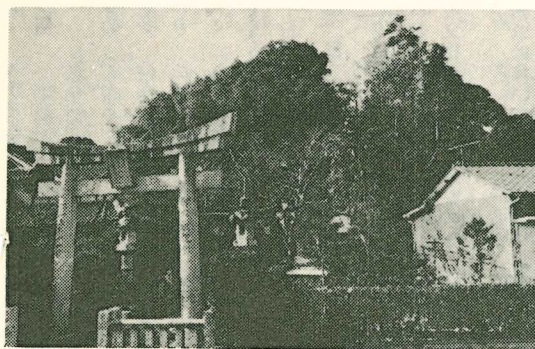
四七年六月より四八年一〇月にかけて実施された北九州市内文化財の悉皆調査において、八幡区内の皇后崎・陣原・本城・則松・折尾地区を担当しましてとくに保護の面で、痛感しました「神社」つまり鎮守の森と社について述べ、先祖より受けついで文化遺産とともに緑の愛護についておねがいしたいと思います。

旗頭神社

社務所はないが、境内は広く、公民館が建てられており、また氏子により管理が行届いており、石造文化財の保存もよくなされているが、境内のすぐ南側に国道三号線があり、車がラッシュしており楠などの大木が、排気ガスにて汚染されはしないかと心配される。

則松鷹見神社

四七年六月、目録作成の段階では、存在していた明治年間に建立の鳥居が四八年七月、最終調査のため訪ねたと



永犬丸鷹見神社

ころ跡かたもなく消えていた。付近の人にたずねると、神社の下まで宅地造成するためにブルドーザーを入れるさい、せまい鳥居は邪魔になり取除かれたと言う。何でも、その鳥居は石垣の基礎になつていとも言われている。たゞ一ノ鳥居が新道の脇に、ポツンと残されている姿は奇妙であるが不幸中の幸である。拜殿は、新建材で補修されていた。

永犬丸鷹見神社

この神社の境内は、うつそうと

した樹木が繁り鎮守の社にふさわしいはずまいを今に残しており頭山満書の灯籠などの石造遺産も整備され郷愁をそそるものがある。

昼下りの木の葉もれの日ざしも落葉にふりそそぎ、心静まる境内である。

八剣神社

調査に訪れた際、道路工事中(四八年九月)であり、崖の埋め土の中に、宝篋印塔の笠部分、半ば土にうもれており、折尾砂岩質の隅飾りや露盤の形より鎌倉時代のものであり、業者に除けられるに頼んでいたが、後日おとずれたときには、何処にも見当らず、相輪や塔身などの行方とともに惜まれる。

また、倒壊した御輿蔵や神殿の回廊に雨さらしになっている「天保〇〇年」銘の木造狗犬とともに荒廃が激しく早急な保存が、待たれる。樹木も全般的にまばらである。

八幡神社

境内の樹木は、うつそうと繁っており、これも鎮守の森は保たれている。参道にある、竿と基礎のみの「嘉永元年」銘の灯籠や砂岩が、可成り風化している「天保七年」銘の手洗鉢が悲しい。これも、拜殿は新建材で腰張りされており、奇異なものを感じる。

蛭子谷神社

本城豊園より北東の蛭子谷谷あり、祠(石造)鳥居(木造)の銘ともに昭和四三年四月吉日奉納とあり、縁起の詳細については不明であるが、周囲の雑木の木立にふさわしいこじんまりとした神社である。

折尾鷹見神社

寛永七年に、穴生鷹見官より遷座された(遠賀郡誌下巻)という神社であり、社務所により維持管理されており、境内も広く昔日の面影をよく残しており「文化八年末二月吉日」銘の鳥居の柱一本がポツンと立っており、傍に他の部分がない。

以上、調査した七社の実態について述べてきましたように、総体的に①社務所の不在が多い②信仰が薄れつつある③氏子が減少している。したがって維持費がないなどで現在、かろうじて神社の体面を保っているものの、則松鷹見神社の例も含めて、境内ギリギリまで宅地化されており、このまま進むと、車の排気ガス、宅地化などにより鎮守の森そのものが、死滅の危機にひんしているため、ここでもう一度、私達の祖先が五穀豊饒を、祈った産土神と厳肅な祭祀に思いをいたし、公園の緑化と鎮守の森の緑を守り、育てて心のかよった憩いの森としようではありませんか。(筆者は本会理事)

投稿

藍島について

小倉南区 中村 穰徳

小倉丸が藍島の本村に入ると、船付場の右手に見事な松の大木が茂っていた(今は枯れている)五社宮がある。名の示すとおり、島に散在していた五社を合祠した社である。神殿に被屋があることや、釘かくしに三階菱の小笠原家の家紋が使われていることに特色がある。

船付場から漁業組合の横を通り、トンネルをぬけると左手の丘の上に荒神社が見える。登る石段も壊れかかっているし、拜殿の屋根も半ば朽ちて衰えな姿である。拜殿の前には鈴の替りに鯛口がさがっているし、お詣りするのに拍手ではなく線香をあげるなど変わったお宮である。神仏混淆の名残りであろうか。

この荒神社には、「藍島荒神社本記」という、神理教の大教主、佐野経彦氏の手になる記録が残っ

ている。この文書の内容が藍島に関する記録では最古の姿を示している。そのまま信用できるできないは別にして、この文書やその他の文書等を参考にして藍島の歴史を推測してみよう。

●仲哀天皇が熊襲征伐で大和から西下され豊浦の宮に行宮された時の一日、宮地である藍島に舟遊びされて漁労の様子を見学されたことがある。この時、海辺で奇しい光を放つ石を拾われたので部下に調べさせたところ、大切な石であるというので大変喜ばれて、此の島人の祖神とし、また、荒魂の鎮石として社殿を忌ノ宮の神宮に建てさせて祭ったという。今から千六百年以上も前のことであるが、その時既に漁人が住んでいたことになる。

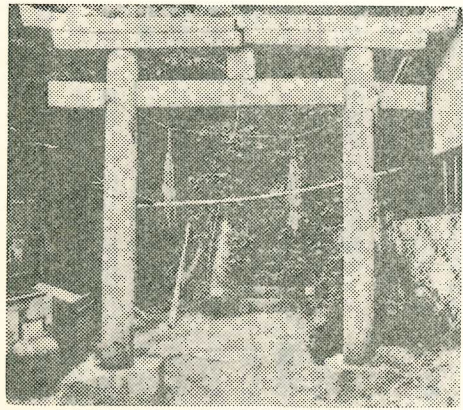
藍島にはその北にある貝島と合せて四十幾つかの古墳がある。或る人の説によると、これ等の古墳は古墳後期のものであるという。すると仲哀天皇の時代より百年位後につくられたことになる。ということとは続いて人が住みついていたと考えられるが、古墳の中からは漁夫の持ち物が出て来ず、むしろ、海の交通に関係のあった人物ではあるまいかといわれている。しかしそれは確実な研究の結論ではない。

●ずっと降って、第一回目の元冠、文久の役の翌年即ち一二七五

年の四月、長門の室津に元の使者がやって来た。使者五人は鎌倉に行き、九月竜ノ口で斬られ、室津に残った従者四、五十人も浜で斬殺してしまつたという。がそれからが大変で海岸は防備に明け暮れるわけである。島々の住人も島から引きあげさせられて防壁などの役に使われたと記録されている。従って藍島や馬島・六連島の住人は殆んど引きあげて無人島になつてしまつたのであろう。

弘安四年六月、博多に二度目の元冠があつたが、その前か後かは不明だが、三百艘の元の軍船が室津に進攻して来て激戦が展開された。一時は危なかつたけれども、かろうじて全滅させることが出来たという。今も各所に遺跡が残っている。しかしながら、その後五十年以上防備が続けられたというから、島の住人であつた人たちが世代が変り防備がとかれても帰郷を忘れてしまつて無人島が続いたものと思われる。

●一五六二年(永録五年)、毛利元就が出雲を攻め取り、尼子の諸將が毛利軍門に降つて尼子家は全滅した。ところが、その臣に阿蘇高秋という勇者がいて、いち早く逃れ、如何にしても主家を再興させねばと、各地に出没して毛利軍を攻めたが戦利あらず、だんだん家来も少くなり、やむなく長門に落ちて来た。下関付近に至



藍島荒神社

りこの辺の海岸をつづくながめ、大小の島々が集り、三方面から船の出入りするところであり、しかも六連島は長門、馬島藍島は豊前、白島は筑前であるから、このように三国が集まるところは三国とも特殊な法規があつて、何処にでも方向転換ができる。逃げるには最も都合のよいところである。海賊業をするにはもつてこいの土地であるとして取り、主家の再興のための軍資金を短期間に獲得できると考えた。そこで馬島の天志に本拠を構え、六連島の高台に見張り所を置き、藍島の高台に舟を隠し、合図によつて直ちに掠奪に出掛けたという。どのくらい活躍したかは知らないけれども、阿蘇高秋は後に毛利氏によつて亡ばされたとも、また、藍島で死んだとも伝えられて

居 ●一六〇〇年(慶長五年)関ヶ原の合戦が終つて、十二月、戦功により細川忠興が豊前・豊後合せて三十七万石の領主として中津城に入城した。慶長七年十一月小倉城の落成と同時に移つて来た。当時

神社名	所在地 (八幡西区)	社有地 (㎡)	祭神	石造遺品 (江戸時代)
旗頭神社	陣原5丁目10番	5.072	武内弥命、大国主命、志賀三神	鳥居4双、灯籠5双
則松鷹見神社	則松字繩手	990	素盞鳴命、速玉男命、事解之男命	なし
永犬丸鷹見神社	永犬丸字宮の谷	564	素盞鳴命、速玉男命、事解之男命	鳥居3双、灯籠2双
八剣神社	本城字坂	2.228	日本武尊、天照大神、神功皇后	鳥居1双、狗犬木造
八幡神社	本城字碓地	2.805	応神天皇、市杵島姫命	鳥居2双、手洗鉢1基、灯籠1双
蛭子神社	本城字蛭子谷	不明	不明	祠(但し昭和43年建立)
折尾鷹見神社	折尾鷹見1丁目	4.653	素盞鳴命、速玉男命、事解之男命	鳥居3双(内1双残欠)